

2024 年度 本郷中学校 第 3 回入試 国語講評

出題形式は同様で大問三問。平均点は 60.0（昨年度 62.7 / 一昨年度 59.9）

【一】 漢字の出題 教育漢字（小学校学習漢字）の書き取り、読み問題

【二】 論理的文章 湯澤規子（ゆざわのりこ）『「おふくろの味」 幻想 誰が郷愁の味をつくったのか』

【三】 文学的文章 藤本ひとみ（ふじもとひとみ）『君が残した贈りもの』

【一】

例年通り短文形式 5 題の出題。出題した漢字自体は標準的なもの。②の「割」の正答率が比較的低く差がついたものになったようだ。ついで①「のきした」、③「墓穴」の正答率が低かった。とはいふものの、平均点は 8 点弱で概ね健闘していた。

【二】

「おふくろの味」という言葉の自明性に疑問を問いかけ、戦後日本の食文化について論じた著作の一節から出題した。客観式の設問の正解率は問二問三の正答率は高かったが、内容理解に関する設問の正答率が 6 割弱にとどまり差がつくものとなった。言葉の知識についての設問についても差がついたようだ。記述式の設問についても少数ながら 11 点満点の答案もあった。空欄のままの答案は少なかった。

【三】

病死した高校球児の知人である高校生が、故人の思いを慮り、その実現に向けて故人のチームメイトと交渉を重ねていく場面から出題した。問題文の前提となる情報を参照し、多くの登場人物や時系列を整理しながら登場人物の心情の変化を読みとれたかどうかを問う出題であった。言葉の意味を問う問題の正答率は高かった。選択式の設問は最後の方の問五問六の設問の正答率が低かった。記述式の設問については 10 点満点の答案こそ少なかったもののある程度の部分点を与えられる答案が多かった。

60 点台後半の得点ならば国語の実力としては充分にあると言えるのではないだろうか。出題の難易度によるところもあるが、極端に低い点数になった層が厚くなったわけではなく、一定以上の学力の受験生がある程度の人数いたのではないだろうか。また、例年第 3 回ともなると空欄だらけの答案が少なからずあるが、今年についても、記述式も含めてそういった答案は少なかった印象である。ただ、記述式の設問の答案では、誤字や脱字などの表記の誤りが前 2 回に比べて多かった印象がある。

2024 年度 本郷中学校 第 3 回入試 算数講評

<講評>

■問題の難易度（昨年同回比）：

昨年同回と同レベル。

■（第3回）の受験者の算数学力：

算数に関しては受験者のレベルは昨年の受験者レベルを考えると、昨年の第3回と同程度の力を持つ受験生が受験していたようである。

■「答案から見られる特徴」と「今後の対策」：

□字はわりと丁寧であった。

■実力差が顕著になった問題（正答率が4割～6割の問題）は以下の通りであった。

- ・大問2(3)：正四角錐を回転させてできる立体の体積を求める問題。数年前にも本校で同タイプの問題を出題している。過去問演習の経験が有利になる。
- ・大問2(5)：条件から整数の値を決定する問題。丁寧に条件を式に変えていくと解ける。
- ・大問3(3)：本校定番のグラフの問題の(3)。例年(3)の得点率は3～4割強くらいであるが、今回は5割強の得点率となり、グラフの問題の攻略が得点を押し上げたようである。
- ・大問4(2)イ：場合の数の数え上げの問題。例年受験者が苦手としている傾向が見える。
- ・大問5(1)：「立体を切って貼る」という操作に嫌気が出たか。内容は難しくないが敬遠された可能性あり。

→「実力差が顕著になった問題」は特に注意して練習しておく
(過去問で類題をピックアップして確認しておく)とよい。

以上

2024 年度 本郷中学校 第3回入試 社会講評

■全体

過去問に比べて単純な知識問題が減り、単語や記号で答える問題ではあるものの、知識を元にしつつ思考を巡らせなければ正答にたどり着けない問題が多くなった。「農産物の生産高の順位」「歴史上の人物名」「憲法の条文」などを覚える努力は続けて欲しいが、「その先」がある前提で学習を続けて欲しい。

■地理

日本海側各県の統計資料を元に問題を作成した。統計表中の県 A ～ F は北から並べてあることを考慮しつつ、特徴や特産品を読み取り、どの県を指しているのか推測してもらいたい。

- 問1 作問者の予想より正答率が悪かった。参考書等の本文のみを読み、記憶しただけでは解けないと考える。普段から一緒に買い物をする、自然との触れ合い、博物館・水族館等の見学、家族での団らん（家族での食事や外食、TV の旅番組などの視聴）などの体験が重要だと感じた。
- 問2 単純に覚えることは塾などでの教育を通して真面目に行ってきた、というような受験生の努力が垣間見えた。
- 問4 どの川が日本海に流れ込むか、また四大公害について理解していない解答をする受験生が散見された。しかし、第2回の受験生に比して、綺麗な字で解答していた。漢字に厳しい採点を行っている「本郷社会科対策」が施された受験生が受けに来ていると推察した。
- 問6 非常に平均点が低かった。京都府と兵庫県が日本海に海岸線を有することを忘れがちであったようである。

■歴史

今回は、時事的な話題を取り上げ、そこから透けて見える権力側の思惑に気づかず、「浮かれたり踊らされたりしないよう警戒するべきである」と伝えることを意図してテーマを設定した。また、例年と同様に、①時代や世紀の大まかなイメージが作れているか（問1・問3など）、②歴史的事実をしっかりと把握できているか（問2・問5・問8・問9など）、③大まかでも時系列に並べられるか（問4）、④似て非なるものを区別できているか（問6・問7・問11など）、などを意識しつつ作問した。いずれにせよ、例えば、「古墳時代といえば前方後円墳」といった単純な理解から即答するのではなく、丁寧に選択肢を検討する、学習した内容を比較・検討して用語を絞り込む、といった分析・思考が必要であろう。また、学習する際には年表で確認する、丁寧かつ正確に漢字で書く習慣をつけておくことをお勧めする。

■公民

2015年に採択されたパリ協定は、世界の平均気温の上昇を1.5℃以内に抑えることをめざしていたが、2023年は1.48℃まで上昇するという危機的な状況に陥った。作問の際には、「Think globally, act locally」の姿勢を生徒たちに意識して勉強してもらいたいという思いをこめて、「人新世」から書き起こした。

また環境問題では文理融合型の問題が大学入試でも出題されることを踏まえ、グラフの読み取り問題を今回も出題している。暗記力だけではなく、与えられた情報を分析する能力を測りたいと考え出題した。結果としてはおおむねよくできている受験生が多かった。

一方で、憲法の自由権・平等権・社会権についての人権規定は、まず一度は読んでおいて欲しいと思う。悲惨な戦争を起こしてしまった過去への真摯な反省を基盤として現在の日本の平和と豊かさが存在していることをしっかりと理解して欲しいと思う。その点で、広島と長崎に原爆が落ちた日—これは日本のみならず世界にとっても重大な日付であると思うが—を、知らない生徒が13%もいたことは衝撃的であった。

2024 年度 本郷中学校 第 3 回入試 理科講評

例年通り、物理・化学・生物・地学の 4 分野から、ほぼ均等な配点で出題した（設問数 31 問 昨年 29 問）。昨年度とはほぼ同数の設問数であったが、受験者平均点が 36.3 点（正答率 48%）となり、昨年度と比較しても、今年度の入試のなかでも、平均点の低いものになってしまった。大問ごとに設けられている応用的な出題に対して、正答率が 20% 程度もしくはそれに満たない設問が複数あったことが要因と考えられた。逆に、そのような正答率の低かった設問にもしっかりと筋道をたて、条件を読み落とさない様に且つ正確に計算を進めることのできた受験生には、かなりのアドバンテージになったものと思われる。

	今年度				昨年度		
	分野	内容	配点	設問	内容	配点	設問
①	化学	二酸化炭素・炭酸水	18	7 問 (計算 3 題)	電流と磁界	16	5 問
②	生物	動物の分類・進化	19	9 問 (計算 2 題)	プラスチック	20	7 問 (計算・記述各 1 問)
③	地学	気象 気圧・気温・雲	19	7 問 (計算 1 題)	動物の誕生	19	9 問 (計算 1 問)
④	物理	物体の重さ・浮力	19	8 問 (計算 7 題)	地形・地質・地層	20	8 問

①化学 炭酸飲料を題材にした水溶液や二酸化炭素に関する問題【説明文の読み取り】10.1 点／18 点（56%）

炭酸飲料を飲みながら話している 2 人の会話文を読んで、水溶液中に気体が溶けていることに関する計算や炭酸水の中に溶けている二酸化炭素の重さを計算させる出題。また、温室効果ガスおよび地球温暖化に関する出題もあった。計算の際に、炭酸飲料の体積を 100 mL か 500 mL のどちらで考えているのか、どちらで答えるのかなど、会話文から条件をしっかりと読みとれていない解答が目立った。炭酸水中に含まれている二酸化炭素の重さを求める設問は、条件の整理がやや複雑でグラフの利用と併せて苦戦した受験生が多かった。

②生物 動物の分類と進化に関する問題【生物の知識・グラフと説明文の読み取り】11.4 点／19 点（60%）

生物の進化に関する文章を読んで、爬虫類・両生類・節足動物・脊椎動物の進化・相同器官について出題した。さらに、動物の温度適応について、動物の体温と外気温の関係を表したグラフから恒温動物と変温動物の分類をする問題や、生息地と動物の大きさに関するベルクマンの法則についてのリード文から簡単な計算問題を出題した。昆虫のなかまを選ぶ設問には、もう少し高い正答率を期待していた。見慣れない進化系統樹や相同器官、ベルクマンの法則の設問に対しては、題意を読み取って、正解に至れたかがポイントになった。

③地学 気象に関する問題【現象のしくみ・用語の解釈】9.3 点／19 点（49%）

2023 年の冬～春にかけての気温や気象に関連させて、天気予報などで耳にする「冬型気圧配置」「観測史上 1 番の高温になった理由」「シベリア高気圧」について出題した。加えて、慣用的な表現として用いられる「花曇り」「春雨」について、雲粒が集まって雨粒になることについての理科的な解釈を問うた。さまざまな気象用語が含まれている選択肢を読んで正解にたどり着くことは、受験生にとって難しかったようである。日頃から、天気予報や気象情報で耳にする特徴ある現象については、興味を持っておいて欲しいと考えている。

④物理 物体にはたらく浮力に関する問題【実験の操作・現象の予測と理解】5.5 点／19 点（29%）

物体にはたらく浮力についての説明文をもとに、水槽の中に容器を立てて、その水槽に水を注ぎ入れていくとき、何秒後に容器が浮き始めるかなどを計算によって求める出題。初期条件として、水槽の底面積から立てた容器の底面積を引いて、注ぎ入れた水の深さを計算する必要があったのだが、この条件を見逃してしまつて大きく失点をした受験生も多かった。また、後半の設問では、実験に電磁石を利用するだけでなく、電磁石の引力と容器にはたらく浮力を合わせて考えたり、グラフを利用したりと、複合的に考えを進める必要があったため、多くの受験生が苦戦したものと思われた。1 題 1 題に対して、水槽に注がれた水面と容器との関係を図示しながら考えることができたか。